

座学以外の講義形式の可能性を求めて  
 一星城大学経営学部「社会探索ゼミ」の試み<sup>1</sup>  
 How we can create learning opportunities outside the classroom:  
 Some Notes on Seijoh Social Exploration Seminar

加藤知子、 神野真寿美、 中島英司 (共同研究者：日下部直美、盧聰明)  
 Tomoko Kato, Masumi Jinno, Eiji Nakashima

はじめに

星城大学は2002年に開学した。それにあわせて、初年次教育の一環として、「文化教養ゼミⅠ・Ⅱ」（「全体講義」と「個別ゼミ」の週二コマ）が設けられた<sup>2</sup>。

2008年に「ゼミ」改革が行われ、「文化教養ゼミⅠ」「全体講義」の代わりに、座学以外の講義形式の可能性を求めて、「社会探索ゼミ」（毎週、学外・学内で、座学ではない学び）がスタート、一方、「文化教養ゼミⅠ」「個別ゼミ」は、授業内容を全面刷新することとなった。「文化教養ゼミⅡ」はそのまま継続の形をとった。

2011年に「社会探ゼミ」改革が行われ、〈毎週、学外・学内で、座学ではない学び〉から、〈学外研修は隔週、その前後に予習・復習を行う〉形へと移行した。

その後、2012年に二回目の「ゼミ」改革が行われ、「文化教養ゼミⅠ・Ⅱ」が「自分づくりゼミⅠ・Ⅱ」へと衣替えすることとなった。この二回目の「ゼミ」改革完成年度となる2013年は、二年次生の履修科目「文化教養ゼミⅢ・Ⅳ」が「自分づくりゼミⅢ・Ⅳ」となり、二年間で完結する「自分づくりゼミ」の「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」全てが開講される年度である。

図表1

2002年 星城大学開学	「文化教養ゼミⅠ・Ⅱ」 →「全体講義」と「個別ゼミ」の週二コマ
2008年 「ゼミ」改革①	「文化教養ゼミⅠ」「全体講義」の代わりに「社会探索ゼミ」（毎週、学外・学内で、座学ではない学び）  「文化教養ゼミⅠ」「個別ゼミ」は、授業内容を全面刷新（「文化教養ゼミⅡはそのまま」）
2011年 「社会探索ゼミ」改革	〈毎週、学外・学内で、座学ではない学び〉から、 〈学外研修は隔週、その前後に予習・復習を行う〉形へと移行
2012年 「ゼミ」改革②	「文化教養ゼミⅠ・Ⅱ」から「自分づくりゼミⅠ・Ⅱ」へ
2013年「ゼミ」改革② 完成年度	「文化教養ゼミⅢ・Ⅳ」から「自分づくりゼミⅢ・Ⅳ」へ

1 本稿は、2013年6月2日、東北大学川内北キャンパスにて開催された大学教育学会第35回（2013年）大会で発表した「座学以外の講義形式の可能性を求めて一星城大学経営学部『社会探索ゼミ』の試み」に、加筆修正を加えたものである。

2 「文化教養ゼミ」の試みについては、大学教育学会第29回大会で発表してある。加藤知子ら（2007）を参照のこと。

本研究ノートは、2008年度から開講されている「社会探索ゼミ」（図表1の破線で囲まれた部分を参照）の歩みを簡潔にまとめ、学生アンケートによる評価を基に、今後の展望を述べるものである。

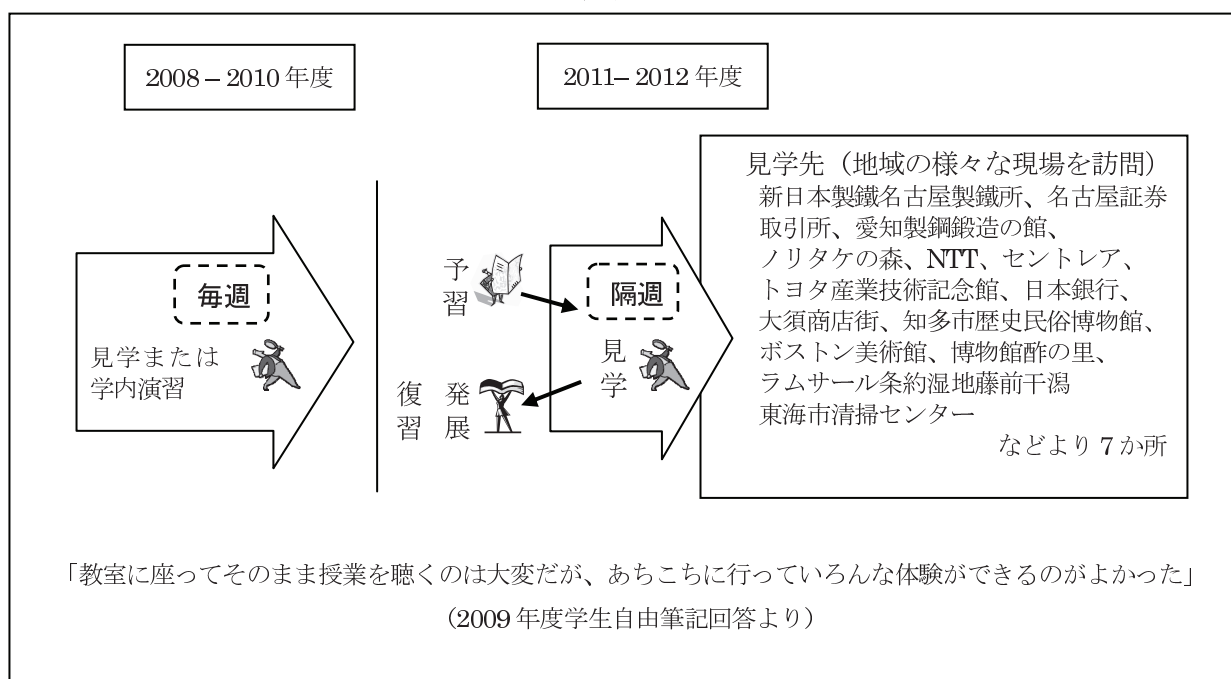
## I. 「社会探索ゼミ」とは

### (1) 「社会探索ゼミ」の経緯と概要

「社会探索ゼミ」は星城大学経営学部生を対象に、初年次教育の一環として一年前期に開講される科目である。大学で有益となる学問の大枠を体験的に学習し、経済・経営、文化教養などについて考えることを目的とする。2013年度現在の活動は、学外の工場・会社見学、文化施設見学、地域探索などであるが、2008年発足当時は、例えば、テーピングやコーヒースクールなど、座学という形を取るものでなければ、学内での活動も行われた。また、当初は毎週異なる活動を行い、その感想などを書くというパターンで授業が進められた。予習・復習のためのコマは設けられなかった。

2011年度からは、見学・探索の前に予習、後にはまとめをする時間を設定、体験型学習は隔週となり、活動領域は学外のみとなった。訪問先は、図表2で示したものの中から7箇所選ぶのだが、担当者ローテーションの都合上、ゼミごとに若干訪問先が異なる。

図表2



### (2) 経営専門教員と文化教養ゼミ担当教員の協働

「社会探索ゼミ」は、経営学部教員とリハビリテーション学部教養担当教員が全員企画に携わるといった形で始まり、その運営も、訪問先によっては、経営学部三・四年次生に開講されている「専門ゼミナール」担当教員と同一年次生に開講されている「自分づくりゼミ（旧文化教養ゼミ）」担当教員との協働で進められている<sup>3</sup>。本節では、そのような協働の成功例として、「大須商

<sup>3</sup> リハビリテーション学部教養担当教員が企画に参加しているのは、「文化教養ゼミ」（現「自分づくりゼミ」）を、リハビリテーション学部教養担当教員も運営しているからである。

店街探索」を提示したい<sup>4</sup>。なお、既述のとおり「文化教養ゼミ」は 2012 年度、「自分づくりゼミ」へと改変されたが、本節の例は 2011 年度のものであるため、「文化教養ゼミ」という名称を用いている。

図表 3

「大須商店街探索」

①役割分担

企画担当者である「専門ゼミナール」担当教員が教材を作成し、予習・現地実習・復習のすべてに主担当者として関わる。「文化教養ゼミ」担当教員は、学生への服装・言葉使い等に関する諸注意・指導、名札、交通費精算分の用意（定期券との差額は大学が支給）、レポートの回収等を担当する。

②大須商店街インタビューの目的

- ・ローカルの中のグローバルを発見する。
- ・大須が活気を取り戻した理由をくまちづくり>の視点で考える。
- ・インタビューすることを通じく経営>することの現場を学ぶ。
- ・人から話を聴くことで、コミュニケーション能力を養い、取材相手からく学ぶ>姿勢を身につける。

③運営

・予習時間

「専門ゼミナール」担当教員作成の教材一式、すなわち、「インタビューの作法」、「取材の心得」、「取材時の質問例」、訪問先店舗にて見せる担当者からの挨拶文書「大須商店街の皆様へ」、「データ編」（愛知県における外国人登録者の常用を概観）等をまとめた冊子が配布され、大須商店街の特色に関する 30 分ほどの説明がある。その後、「文化教養ゼミ」担当教員が引継ぎ指導、学生は取材班ごとに取材計画を立て提出する。

・見学当日

「文化教養ゼミ」担当教員は「専門ゼミナール」担当教員に帯同し、現地までの移動から解散まで無事終了するよう学生指導にあたる。

・復習時間

「文化教養ゼミ」担当教員の指導の下、取材班ごとに所定の書式に従って、報告書を作成する。報告書は「文化教養ゼミ」担当教員が回収し、「専門ゼミナール」担当教員が評価する。

2013 年度現在、「自分づくりゼミ」（旧「文化教養ゼミ」）担当者と「専門ゼミナール」担当者が協働して運営する企画は合計三つであるが、これら全てが、本節図表 3 で示した例のような協働の形を取るわけではない。各企画がその目的にかなった学びの体験となるためには、担当教員間で予習から復習に至るまでの協力の在り方について更に検討しなければならないが、これは今後の課題でもある。

<sup>4</sup> 本例は、星城大学経営学部平岩恵里子准教授（当時）の運用例である。

## II. 学生アンケートから見る社会探索ゼミ

「社会探索ゼミ」では、毎年アンケート（自由記述）を実施している。本章では、その分析結果を報告したい。

### （1）分析対象としたデータと分析方法

データは、旧「社会探索ゼミ」の最終年度である 2010 年度、新「社会探索ゼミ」のノウハウ蓄積や、その成果が上がりつつあると判断できる年度である 2012 年度のもを扱った。更に、その中でも、2010 年度は、E・F・H・Jゼミのものを、2012 年度は、F・H・K・Lゼミのものを分析対象とした。これらは、自由記述の箇所が＜原文ママ＞で文化教養ゼミ／自分づくりゼミ運営委員会に報告されたものであるからである。他のゼミの場合は、「文化教養ゼミ」担当教員らにより、委員会報告以前に既に何らかの分析やまとめがなされていたりしており、＜原文ママ＞の素データを集めることができなかった。報告形式を統一することは、今後の課題である。

分析対象となったアンケート回答者数は、2010 年度 E ゼミ 18 人・F ゼミ 19 人・H ゼミ 18 人・J ゼミ 14 人、合計 69 名（履修者数合計 210 名（うち留学生 45 名））であった。更に、2012 年度は、F ゼミ 21 人・H ゼミ 20 人・K ゼミ 17 人・L ゼミ 18 人、合計 76 名（履修者数合計 167 名（うち留学生 34 名））であった。

図表 4

- ・ いい親友ができました。(10 EC 1)
- ・ 4月から8月ちょっとの間でしたが、この社会探索ゼミを受けてよかったと思いました。最初は、社会のことや文化など、私たちの知らないことばかりでした。ですが、この社会探索ゼミでたくさんのことを学びました。学外の工場、会社見学、文化施設見学、地域探索、学内演習など積極的に参加して良かったです。星城大学でこのような講義がありとても勉強になりました。このゼミで、色々な人たちと交流して自分のための勉強になりました。この社会探索ゼミは来年入学する後輩に勧めます。社会探索ゼミで習ったことは忘れないようにします。

分析は、自由記述のテーマ毎にカテゴリーを形成する手法を取った。学生の回答からテーマを見つけ出し、それぞれに記号を割り当てた。例えば、図表 4 は学生アンケート自由記述の一部を示しているが、「いい親友ができました」という記述の「親友」という単語から、「友達づくり」というテーマが浮かび上がる。そこに、「10 E C 1」という記号を割り当てた。10 E C 1 とは、2010 年度 E ゼミ、C 君の一番目のテーマという意味である。

回答が長い場合は、その中に複数のテーマが含まれているので、テーマ毎に区切った。例えば、上記図表 4 の二番目の記述例の場合には、社会探索ゼミ全体の感想、社会・文化の学び、学外見学に積極的に参加して多くを学んだ、交流を深めた、後輩に勧めたい、社会探索ゼミで得た知識を忘れないよう努力する、というテーマが見られる。これらテーマ毎にそれぞれ記号を割り振っ

たものを図表5に示す。10ED1とは、2010年度のEゼミのD君の1番目のテーマだという意味である。以下同様に割り振ってゆく。

図表5

- ・4月から7月ちょっとの間でしたが、この社会探索ゼミを受けてよかったと思いました。(10ED1)
- ・最初は、社会のことや文化など、私たちの知らないことばかりでした。ですが、この社会探索ゼミでたくさんを学びました。(10ED2)
- ・学外の工場、会社見学、文化施設見学、地域探索、学内演習など積極的に参加して良かったです。星城大学でこのような講義がありとても勉強になりました。(10ED3)
- ・このゼミで、色々な人たちと交流して自分のための勉強になりました。(10ED4)
- ・この社会探索ゼミは来年入学する後輩に勧めます。(10ED5)
- ・社会探索ゼミで習ったことは忘れないようにします。(10ED6)

上記図表5の10ED4には、「交流して」という表現が見られる。図表4の「親友」と書かれた10EC1のテーマと同様、他にも、似たようなテーマが見られた学生諸君の回答があったため、それらをまとめて、「友達づくり」という下位カテゴリを作った。この他、「教員と話せて良かった」という回答も複数見られたので、これらをまとめて「教員と交流」とし、「友達づくり」と「教員と交流」を更にまとめて「交流」という上位カテゴリを作った。その他の回答についても同様の手順で作業を行い、カテゴリを形成した。カテゴリが出揃ったところで、それらをグループにまとめた。テーマ(コード)の付与ならびにカテゴリ(上位・下位)、カテゴリグループの形成に関しては、客観性と一貫性を保つために研究者五名で検討を重ね、カテゴリの作り直しを徹底した。

2010年度と2012年度は分けて分析し、「社会探索ゼミ」改革前と後の違いがカテゴリの差として出てくるのかを見た。なお、分析のデータとなった学生諸君の自由既述は膨大なため、紙幅の都合上、本研究ノート全てに含めることはできなかった。更に、下位カテゴリも多岐に亘るので、必要の無い限り、本研究ノートでは、上位カテゴリのみの提示とする。

## (2) 分析から浮かび上がった上位カテゴリ

まず2010年度の上位カテゴリとしては、「現場を訪問したり実際に体験したりすることの重要性」、「日本理解」、「プログラムに対する肯定的評価」、「有益」、「面白さ・楽しさ」、「教員に対する肯定的評価」、「交流」、「成長」、「将来」、「級友に対する肯定的評価」などが現れた。「現場を訪問したり実際に体験したりすることの重要性」を形成したテーマはとて多かった。これらを合わせて、「肯定的意見」というカテゴリグループとした。

その他、提言に関するテーマもたくさん見られた。「カリキュラムに対する提言」、「プログラムに対する提言」、「授業方法に対する提言」、「訪問先に対する提言」、「移動時間に対する提言」、「時期に対する提言」、「服装に対する提言」、「教員に対する提言」、「後輩への推薦」、「ゼミ続行を希

望」などが挙げられた。これらをまとめて、「提言」というカテゴリーグループに入れた。

2010年度は、否定的評価もかなりあった。「カリキュラムに対する否定的評価」、「プログラムに対する否定的評価」、「授業方法に対する不満」、「天候に対する不満」、「服装指定に対する不満<sup>5</sup>」、「教員に対する否定的評価」、「クラスメートに対する不満」、「孤立」などである。「時間割に対する苦言」もあったが、これは、再履修生のものである<sup>6</sup>。これらをまとめて、「否定的意見」というカテゴリーグループに入れた。否定的評価が少なくなかったのは、当時の社会探索ゼミは毎週、学内・学外での異なる企画に基づく活動を行っており、〈いきなり現場〉、〈活動・見学して終わり〉という同ゼミの運営スタイルに対する、学生諸君の、〈いきなり感〉や〈遣り残し感〉が現れているのではないかと考えられる。

なお2010年度は、評価が混在しているため「中立」としか分析しようのない意見や、また、「(「社会探索ゼミ」の)再履修生だ」というテーマもあり、それらはカテゴリーグループに入れることができなかった。

2012年度は、「実際に訪問することの重要性」、「経営学への気づき」、「歴史・文化」、「日本理解」、「プログラムに対する肯定的評価」、「有益」、「面白さ・楽しさ」、「交流」、「成長」、「将来」、「思い出」などが上位カテゴリーとして現れた。なお、「プログラムに対する肯定的評価」の下位カテゴリーには、「予習・復習」に対する肯定的評価が数多くあった。それを一つの独立した上位カテゴリーとしても良かったかもしれない。これらをまとめて、「肯定的意見」というカテゴリーグループに入れた。

提言に関しては、「カリキュラムに対する提言」、「プログラムに対する提言」、「授業方法に対する提言」、「訪問先に対する提言」、「訪問回数に対する提言」、「時期に対する提言」などの上位カテゴリーが形成された。なお、「カリキュラムに対する提言」の下位カテゴリーの中には、「後期も継続提言」、「二・三年次も継続提言」が見られた。これらをまとめて、「提言」のカテゴリーグループに入れた。訪問先や訪問回数に対する提言は、学外見学を隔週にしたため、訪問先が減少したことに伴い、現れてきたものであると思われる。

否定的評価に関しては、「プログラムに対する否定的評価」、「授業方法に対する不満」、「訪問先に対する不満」、「移動方法に対する不満」、「時期に対する不満」が形成された。これらをまとめて、「否定的評価」というカテゴリーグループに入れた。なお、2012年度は、否定的評価は激減していることを補足しておく。更に、2012年度は、カテゴリーグループに入りきらなかったカテゴリーはなかった。

### (3) アンケートから見る社会探索ゼミ

結論を先に述べるとするならば、2010年度・2012年度とも、教員が願う事柄は達成されていると言うことができよう。現場で実際に見て・触れて・体験して学んで欲しいという思いで始まった「社会探索ゼミ」であるが、実際、そのように学んだと回答する学生諸君が多数であったからである。また、〈社会〉に出たの学修という科目の性格を反映して、本科履修のおかげで社会人準備の心構えもついたようである。

2010年度・2012年度学生アンケートの分析から読み取る限りにおいては、「社会探索ゼミ」はいくつかの課題を抱えつつも、少なくとも大学での学びへの心構えの土台を提供することはでき

<sup>5</sup> 訪問先によっては、スーツ着用などの服装指定があった。

<sup>6</sup> この再履修生は、「社会探索ゼミ」終了後、再履修用科目を受講しており、「社会探索ゼミ」訪問先によっては、この再履修用科目始業時間までに大学に帰ることが困難な場合もあったのである。



たのではないかと思われる。

予習・復習導入後のアンケートである 2012 年度のものには、予習・復習のコマを評価する回答も多数見られた。予習・復習に肯定的なテーマが見られたのは興味深い。予習・復習は所謂<座学>なのだが、これらの作業により、<いきなり感>・<遣り残し感>が払拭されたのではないかと想像できる。予習の時間を設けることにより、訪問先に対する学生諸君の不安が拭われたり、偏見が取り去られたり、違う視点で訪問できるようになったようである。

同時に、予習・復習導入後は「社会探索ゼミ」全体に対する否定的意見が激減している。予習・復習での作業のおかげで、現場の理解が更に深まり、その結果、学生諸君の意識の中では、ゼミでの訪問が、<単なるお出かけ>から<大学での学び>へと近づいたようである。

一方、学外活動を隔週にしたため、訪問先が減ってしまい、学びのフィールドは減少している。限られたコマ数と予算の中で、学びの深化（予習・復習の導入）と、学びの広がり（訪問先の確保）のバランスを取ることに難しさを感じさせる。

気になるのは、所謂<社会人基礎力>のいずれかが身に付いた、という回答がアンケートに見られなかったことである。図表 6 は、星城大学が学生諸君に身につけて欲しいと考える<社会人基礎力>を示している。これらを現行の「社会探索ゼミ」で伸ばすことは、残念ながら十分にはできていないのが現状である。教員が企画しているプログラムに学生諸君が参加するという形を取る限り、率先力や発想力、計画力や実行力などを育てることは難しいのではないかと思われる。

高等学校を卒業したばかりの学生諸君を対象にした、前期半年の科目のみで、彼らの<社会人基礎力>を伸ばすことは容易ではないが、それでも、改善する（できる）点はいくつかある。次章では、それら解決に向けての糸口となるいくつかのヒントを挙げたい。

図表 6

・ 率先力	自ら進んで他の人を引っ張っていく力
・ 連携力	皆で協力できる力
・ 実行力	学ぶだけでなく、行いに繋げる力
・ 発想力	新しい考えができる力
・ 計画力	計画できる力
・ 説得力	単に命令するだけでなく、相手に納得してもらおうよう説明できる力
・ 対話力	難題を話し合いで解決できる力
・ 洞察力	物事を見抜ける力

### Ⅲ. 結びにかえて—今後の課題—

結語としての本章では、「社会探索ゼミ」の今後の展望を考える上での課題と、解決の糸口となるヒントを挙げてみたい。

前章でも指摘したが、現行の「社会探索ゼミ」では、企画・運営を教員が担当し、その与えられた枠組みの中で学生諸君が活動する、という形式を取っている。社会の現場を垣間見るとい同科目の性質上、履修後は学生諸君の中では、社会についての学びならびに、将来社会人となる

という心構えは芽生えてきているようである。しかしながら、企画・運営主体としての参加を彼らに要求する機会を与えないままで終了してしまう現行の「社会探索ゼミ」は、謂わば、「学思行」の「行」が不足しているのだとも言えるかもしれない。

「学思行」とは、現愛知県東海市出身で江戸時代の儒学者、細井平洲（1728 – 1801年）の、「學思行相須つ」（学び、考え、そして実際に行動することで、本当に学んだことになる）という言葉に由来する。

<学び>、<思っ>ているだけでは不十分で、それが<行い>に現れて初めて学びの効果があつたと判断できる、というのであれば、<学び>、<考え>て終了する現行の「社会探索ゼミ」に<行い>が欠けているというのは、克服しなければならない最大の課題であるとも言えるのかもしれない。

この視点に立ち、<行>の不足分を補うためのヒントを三つ挙げてみようと思う。

一つ目は、2012年度より星城大学経営学部カリキュラムに登場した「フィールドワーク」へと学生諸君を積極的に誘う、ということである。「フィールドワーク」は、地域のまちづくりやNPOなどに参加、各々のフィールドで課題を発見し、その解決を探る、という科目である。本科目に学生諸君を参加させることで、「社会探索ゼミ」での学びを<行い>へと落とし込ませることはできないだろうか。

二つ目としては、既存の活動を上手く活用することが考えられる。すなわち、クラブ活動・大学祭などで、企画力・率先力・協働の力などを養わせる、インターンシップへの参加を促す、ゼミ内での<仕事>（例えば、論文集の印刷など）を学生諸君に担わせ、責任を持たせる、などである。

三つ目は、長期的展望に立つことを要求するものであるが、次回カリキュラム変更時、「社会探索ゼミ」を一年次後期以降も開講するよう提言することである。現行は一年次前期のみの開講であり、教員側が用意したメニューに従って学生諸君が動くというパターンを繰り返して学期が終了してしまう。一年次後期も引き続き「社会探索ゼミ」を開講し、その中で、後期は学生諸君が企画・運営を担えるよう追い込んでいくというのはどうだろうか。

一年次前期開講の一つの科目だけで、「学思行」全てをカバーすることは困難でありつつも、現行の「社会探索ゼミ」では「学思」の芽生えが見られるというのであれば、それを「行」へと完成させるためには、科目を新設するにせよ、既存の科目履修へと学生諸君を誘うにせよ、他科目との連携が必要となる。それが可能か否かは、大学全体で学生諸君をどのように育てるのか、その仕組みをどこまで教員間で共有できるかが鍵となるであろう<sup>7</sup>。星城大学経営学部教員とリハビリテーション学部教養担当教員全員が企画に参画するという形で始まった「社会探索ゼミ」の初

---

<sup>7</sup> なお、その他の課題としては、「社会探索ゼミ」でも学びの関心を惹起することのできなかった学生諸君が存在するということが挙げられる。座学では学生たちの中に学びの関心を沸き起こすことが困難であろうという前提のもと始まった「社会探索ゼミ」であるが、本科目で<学修にわくわく>した学生は、実は、座学でも<学修にわくわく>の学生であった。一方、座学で<スマホ>の学生は、「社会探索ゼミ」でも<スマホ（や、道行く女子高校生）>のほうに目がいってしまう。場所を変えても学修以外に注意を向けてしまう、これらの学生の、学びへの関心はどのように引き出すことができるのか、これも常に課題となるであろう。

また、「社会探索ゼミ」はコストのかかる授業で、今後継続するにあたり、経済面から困難となるかもしれない。



心に立ち返り、この科目をどのように発展させていけばよいのか、他の科目との連携も含めて、教員全員が再検討する時期に来ているのかもしれない。

#### 参考文献

加藤知子・神野真寿美・加藤順一・小林康男・中島英司・村上美保子（2007）「新しい形の教養教育の模索—星城大学経営学部『文化教養ゼミ I・II』の試み」『大学教育学会第 29 回大会 発表要旨集録』、pp.126- 127。

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社。

初年次教育学会編（2013）『初年次教育の現状と未来』世界思想社。